

# 基地従業員女性と軍事化

— 沖縄の在日米軍基地と女性に注目して —

金盛文香

慶應大学環境情報学部 4年

71842195

2021年1月28日

キーワード

沖縄、米軍、基地、フェミニズム、軍事化

目次

## 第1章 沖縄と女性と基地従業員

1-1、研究主題

1-2、研究背景

1-3、先行研究の検討

1-3-1、軍事化された沖縄

1-3-2、フェミニスト国際関係論

1-3-3、日本における国際関係のジェンダー分析

1-3-4、沖縄における国際関係のジェンダー分析

1-4、研究対象

1-5、研究方法

## 第2章 基地従業員の語り

2-1、就業動機と就業に伴う葛藤

2-1-1、異なるライフサイクルの女性と男性

2-1-2、英語の駆使に関わるステイタス

2-1-3、政治的行為者としての基地従業員女性

2-1-4、本節のまとめ

2-2、兵士に対するアンビバレントな感情

2-2-1、基地内の兵士に対する恐怖

2-2-2、人種化された権力関係に対するいくつかの抵抗の形

2-2-3、本節のまとめ

2-3、基地従業員たちの抵抗と恭順

2-3-1、基地がない沖縄への希望、男性の抵抗と女性の抵抗

2-3-2、本節のまとめ

## 第3章 本研究のまとめ

参考文献

## 第1章 沖縄と女性と基地従業員

### 1-1、研究主題

沖縄の基地従業員女性の経験とはどのようなものか。フェミニスト国際関係論に依拠し、沖縄の女性の経験に焦点を当てる。これを通して、ジェンダー化された沖縄の軍事化の様相を明らかにすることを目的とする。

### 1-2、研究背景

フェミニストの国際政治理論家であるシンシア・エンローは、軍事主義のジェンダー分析において、国際的に第一人者と言われている(上野 2006:v)。彼女は、軍事化を、根本的に家父長制的な帰結を持ち、男らしさを特権化するプロセスだとしている(Enloe2000=2006:230)。女らしさの概念や女性の分断をつくることによって、軍事化は維持され、進行されてきた。その土地の約7割<sup>1</sup>を在日米軍基地が占めている沖縄を代表するように、日本でも軍事化は維持され、進行されてきた。本研究は、それを可能としてきた策略に注目し、軍事化を捉えなおす機会を提供したい。

### 1-3、先行研究の検討

#### 1-3-1、軍事化された沖縄

現在、沖縄には全国の米軍専用施設面積の約7割が存在している。沖縄における軍隊の過密配備は、歴史的経緯(松本 2004,池宮城 2018)や、日米沖政府の対立(松本 2004, 島袋・阿部 2015)などで説明されてきた。これら国家や政府レベルの研究だけでなく、人々や個人の経験から、沖縄の状況を捉える研究も存在する。星野(2013)は、沖縄県民の意見・要求が本土に届いていない点を問題に設定し、米軍基地問題を分析している。宮城(2017)では、沖縄の女性の経験に注目することで、軍事化の構造を明らかにした。

---

<sup>1</sup> 沖縄県には全国の米軍専用施設面積の約7割が存在しており、沖縄本島面積の約15%を占めている。(沖縄県,2020,「沖縄から伝えたい。米軍基地の話。Q&A Book 令和2年版」)

本研究も、人々や個人の経験に注目して、沖縄の軍事化を分析する。特に、女性の経験に焦点を当て、フェミニスト国際関係論に依拠して分析を行う。

### 1-3-2、フェミニスト国際関係論

フェミニスト国際関係論とは、軍隊の政策決定者は、女性と女らしさを管理しそれに依拠しており、男女の性的関係のように私的だと思われているものが、公的な国際政治と密接に関連していること（佐藤 2006:303）を説明した理論である。このようなジェンダーの視点で国際関係を考える回路が大きく開かれたのは、1990年代に入ってからである（林 2007）。フェミニズム国際政治学者アン・ティックナーは、「国際政治は優れて男性の世界」であり、「国際政治に関係する地位に女性がつくことは困難」である理由を、フェミニズムの手法で解き明かそうとした（Tickner1992=2005）。ティックナーや他の国際政治学者たちは、「女性はどこにいるのか？」という問いを発し、女性の不在と女性の不可視性を指摘した。シンシア・エンローはこの問題提起に、論理的な応答をした。エンローは、フェミニストの国際政治理論家であり、軍事主義のジェンダー分析では国際的に第一人者と言われている（上野 2006:v）。彼女は、「フェミニスト的好奇心」によって、「女性の経験」を国際関係の中に書き込むことを試みた。これによって国際関係に新たな争点と行為主体—受動的かつ能動的主体としての女性—を組み入れたのである（佐藤 2006:301）。

エンローは、これまで不問とされてきた「日常」の中の軍事化プロセスに光を当てようとする。彼女は「軍事化とは、何かが徐々に、制度としての軍隊や軍事主義的基準に統制されたり、依拠したり、そこからその価値を引き出したりするようになっていくプロセスである」（Enloe2000=2006:218）と定義した。そのため、「女性の軍事化」とは、女性が兵士として軍事化されるだけでなく、兵士の母や妻として、軍服のデザイナーとして、兵士が行うレイプの被害者として軍事化されることを意味する（上野 2006:v-vi）。軍隊に制度として、軍務に公的活動として、の価値を与えるために、政府や政治指導者らは、特定の女性に対して特定のやり方で政府を支持させるような策略を取ってきた（Enloe2000=2006:222）と述べる。それにより、愛国的な

母や恥じるレイプ犠牲者など、女らしさの概念や女性の分断をつくりだしてきた(Enloe2000=2006:222)。

次項以降では、国際関係をジェンダーの視点で分析し、女性の経験に着目した先行研究を整理する。

### 1-3-3、日本における国際関係のジェンダー分析

日本において、女性のミクロな経験とマクロな国際政治の関係性に注目した研究として、平井(2014)と茶園(2014)が挙げられる。

平井(2014)では、アメリカによる日本占領を、敗者一勝者の男性間で取引された女性たちの体験から見直すことで、軍事占領と女性解放を安直につなげることの矛盾を明らかにした。さらに、売春禁止運動を担った廃娼運動家や女性国会議員・地域婦人会の女性たちと、売春女性たちの間には大きな分断があり、これが結果として軍事化(日米安保体制・軍事基地)を支えることにつながった、と述べる。ここには、女性を「護られる女性=『良家の子女』」と、売春女性(「転落女性」「特殊婦人」)に二分化する男性中心的な「策略」の罫がある、としている。

平井(2014)と同様に、茶園(2014)も、女性のミクロな経験から、占領期の日本を捉えなおす。茶園(2014)は加えて、受動的かつ能動的主体としての女性、行為主体としての女性を描き出した。

茶園(2014)では、占領期の日本のGI(米兵)と日本のおんなたち<sup>2</sup>、とりわけ「高級街娼」とみなされたおんなたちとの関係性に注目した。彼女は、占領期の日本を、単に勝者米国が敗者日本を統治した場というだけでなく、日本のおんなたちとGI(米兵)が対等に相互交渉を行っている場であったことを明らかにした。さらに、おんなたちが強制的性病検診を受けるために待つ空間であった、病室の待合室にも注目する。茶園は、病院の待合室を、GHQや日本政府がおんなたちの間に「分断支配」(Enloe2000=2006)を持ち込もうとする空間として捉えている。その中で、おんなたちは「分断支配」を回避し、助け合う姿を見せていた。

次項では、沖縄に注目した先行研究を取り上げる。

---

<sup>2</sup> 茶園 2014 の表記をそのまま踏襲している。

### 1-3-4、沖縄における国際関係のジェンダー分析

戦時、戦後の沖縄における国際関係のジェンダー分析では、女性の経験への注目だけではない。エンローの指摘する、軍事化の策略が作り出す女らしさの概念や女性の分断にも言及された。ここでは、宮城(2019)と菊池(2002)を取り上げる。

宮城(2019)では、琉球が日本に併合され、近代国民国家建設に組み込まれる過程の中で、沖縄の女性を襲った「被近代化」の暴力性について“貞操観”に注目して分析している。戦時中、日本への「同化」を求められた沖縄では、女子教育において「良妻賢母」思想教育が行われた。加えて、沖縄の「風俗改良」を目的に、沖縄女性の貞操観に言及しながら、沖縄の長年続く慣習を改良しようとする。沖縄戦の中で、米軍の上陸を合図に沖縄県内各地で起こった「集団自決」は、日本国家による60年余りに及ぶ暴力的な「被近代化」のプロセスで、女性への「純潔」「貞操」思想を押し付けた、天皇制をベースにした家族国家観の総決算といっても過言ではない、と述べている。

菊池(2002)は、米軍占領初期の沖縄における、売買春禁止の言説に注目している。売買春禁止の言説は、住民と軍の交渉において重要な位置にあった。また、恣意的な売春言説が、占領状況の構築にとって重要な意味を持っていたことも明らかにしている。彼女は、最も緊密な軍事支配のもとにおかれた沖縄社会において、軍事権力とセクシュアリティ統制の有機的な関連が垣間見えたと述べる。

現代の沖縄に注目した研究では、宮西(2012)、ワイネク・佐藤(2019)が挙げられる。宮西(2012)とワイネク・佐藤(2019)の研究では、軍隊や基地と関わる女性たちの経験に迫っている。彼女らの研究は、葛藤を抱く女性たちの姿を描き、受動的かつ能動的主体としての女性、行為主体としての女性を捉えている。

宮西(2012)は、軍隊の暴力性を前景化させるこれまでの研究が、沖縄女性の経験を被害に特化して対象化していることを批判した。沖縄の米軍人妻の経験に注目している。軍人妻でありながら、戦争・基地反対という環境で育ったため、基地を手放して擁護できないという矛盾を抱える女性の存在も明らかになる。しかし、米軍の充実した家族支援制度の利用や、沖縄の伝統文化やジェンダー規範からの脱却を可能とした。軍人妻たちが葛藤に直面する姿と、それを克服しようとする姿を描き、自立的に行動する女性たち

の姿を記述した。

これに対して、ワイネク・佐藤(2019)は、「米軍と沖縄社会との間にある構造的な不平等にまったく触れていない点で問題を孕んでいる」と指摘する。ワイネク・佐藤(2019)は、沖縄の在日米軍基地で働く従業員女性に焦点を当てた。基地従業員女性たちは軍事化されジェンダー化された構造に従順なだけの犠牲者として存在するわけではない。自身の社会的地位と経済的状況を改善し、時に小さな抵抗を示す基地従業員女性たちを、ワイネク・佐藤(2019)は能動的な行為者だとする。しかし、それは彼女たちが在日米軍の協力者として生きることを選びとり、抑圧的な構造を自ら再生産することでもあった、と述べる。

本研究は、現在の沖縄における軍事化に注目する点で、宮西(2012)、ワイネク・佐藤(2019)の続きを描く研究と位置付けられる。そこで、本研究は、ワイネク・佐藤(2019)の課題である、さらなる女性従業員の語りの収集と、男性の経験への注目に挑戦する。

#### 1-4、調査対象

本研究の調査対象は、沖縄の米軍基地で基地従業員として働く男女1人ずつである。エンローは、「軍隊領域と民間領域にまたがる位置にある女性たちにきめ細かい注意を払うことで、いかにして、そしてまた何を代償にして、女性たちが軍事化されてきたのかを学ぶことができる」(Enloe2000=2006:53)と述べる。ワイネク・佐藤(2019)では、基地従業員たちを「基地とホスト社会をつなぐ重要な存在でありながら、ほとんど研究の対象とされてこなかった」と述べ、その経験に焦点を当てている。ワイネク・佐藤(2019)の課題に挑戦する本研究では、ワイネク・佐藤(2019)と同様に基地従業員を対象とする。加えて、ジェンダー化された軍事化の解明のために、基地従業員の男性も対象とした。調査対象の男女は、夫婦関係にある。個人が特定されないよう名前は仮名を用い、女性をAさん、男性をAさんの夫として記述する。同様の理由から就職先も、Aさんは事務系の職種、Aさんの夫は技術系の職種と記載するに留める。

## 1-5、調査方法

本研究では、半構造化インタビューを実施した。エンローは、「ジェンダー化された軍事化を促進するこうした意思決定の調査は、しばしば、アンビバレンスへと、すなわち、迷いを持った男女へとたどりつく」(Enloe2000=2006:37)としている。ワイネク・佐藤(2019)は、「曖昧さやアンビバレンス、緊張感や微妙なニュアンスを大事にするため」半構造化インタビューを採用したと述べた。これらの研究を参考にし、半構造化インタビューを選択する。質問項目は、基地で働くことの良い点、悪い点や兵士との関わり、周囲からの反応などである。AさんとAさんの夫は、同時にインタビューを行った。Aさんへのインタビューに、Aさんの夫が補足的に回答する形となっている。インタビュー実

施の詳細は以下である。

対象者	インタビュー日時	インタビュー時間	インタビュー場所	録音の有無
Aさん Aさんの夫	2021/11/28	1時間11分	移動中の車内 夫の勤務先の基地内 にあるフードコート	有

分析においても、アンビバレンスに注目をする。ワイネク・佐藤(2019)では、基地従業員女性たちの両義的な感情に注目し、以下のようなテーマ群で記述している。「就業動機と基地労働に伴う葛藤」「兵士に対するアンビバレントな感情」「基地従業員女性たちの抵抗と恭順」である。本研究も、このテーマ群に従いながら分析を行う。

## 第2章 基地従業員の語り

### 2-1、就業動機と基地労働に伴う葛藤

本節では、「就業動機と基地労働に伴う葛藤」に焦点を当てて分析していく。基地労働へ参入していく人々は、沖縄社会におけるジェンダー構造の中で困難を抱えていた。それが就業動機と結びついている。また、基地従業員女性は、アメリカを沖縄社会より優位なものとして認識している。そのアメリカと関係を結ぶことで自らの社会的地位を押し上げようとしている。しかし、基地や軍隊の全てを受け入れているわけではなかった。「優れて男性の世界」(Tickner1992=2005)とされていた、軍事という国際政治の中で、政治的行為者としての意見を持つ女性も存在する。以下、詳細を記述していく。

#### 2-1-1、異なるライフサイクルの女性と男性

第一グループ 継続就業コース	入職時年齢：10代後半～20代 就職時に子どもがいないか、まだ小さかった女性
第二グループ 再就職コース	入職時年齢：40代以降 出産後は基地外でパート、専業主婦を経験し、子どもが大きくなってから基地従業員となった女性
第三グループ 独身女性コース	離婚経験をもち、1人で生計を立てる女性

(ワイネク・佐藤(2019):98-99をもとに筆者作成)

ワイネク・佐藤(2019)では、インタビュー対象者を上記の表の3つに分類し、就業動機を記述した。すべてのグループの女性が基地への就業動機としてあげたのは、時間の余裕と給料の相対的な高さである。また、年を経るごとに基地外における正規雇用の職がなくなっていくため、これに比例して彼女たちの基地依存度も高くなっていく、とされている。

本研究の対象者Aさんは、上記の3つのライフサイクルには当てはまらないが、同様の就業動機を語る。加えて、沖縄社会ほど個人情報に気にならない基地労働に魅力を感じていたことを述べる。男性であるAさんの夫の語りからは、女性と異なる就業動機を見出すことができる。以下、その詳

細を記述していく。

まず、Aさんの語りを取り上げて、就業動機を考察する。彼女の入職時年齢は30代で子どもがおり、離婚経験がある。しかし、再婚をしており、夫も基地従業員である。Aさんは、ワイネク・佐藤(2019)の分類とは異なるライフサイクルであるが、就業動機は共通している。入職時は、第三グループの女性と同様に、生計を1人で立てなければならず、子どもを育てる必要もあった。シングルマザーという立場から、「公務員に準ずるっていうか、保証されている」「定時に帰れて、生活パターンがつくれる」と評価する。Aさんはその後、再婚し、1人で生計を立てる必要はなくなった。第三グループの女性に比べると、Aさん自身の基地への依存度は低くなったといえる。しかし、Aさんの夫も基地従業員であることを考えると、基地依存度は高いまともいえる。

また、Aさんは年齢や家族構成などの個人情報に気にしない基地労働の魅力を感じていた。

40代後半とか50代前半でやっぱなかなか民間では、正社員ってのはね、なかなかね、難しいですよ。年齢的にね。

やっぱりアメリカンスタイル。離婚しようが結婚しようが、そんなの別になって感じ。

これらの語りから、沖縄社会と比較して、家族構成を気にせず、どのような年代でも雇ってくれる基地労働を女性が選択していく様子が見えてくる。

続いて、Aさんの夫の発言を中心に男性の就業動機を考察する。Aさんの夫も就業動機の一つとして、個人情報をあまり気にしない点を挙げた。Aさんの夫は以下のように語る。

沖縄の現状って、やっぱりベースに働いたら安定するっていう。だからみんなここに入りたがるんです。年齢制限もないですよ。大卒とかそんなのも関係ない。中卒でも入れるから。50過ぎても新規採用でとる。

夫も、Aさんと同様に、どのような年代でも雇う基地労働を評価している。しかし、年齢に注目すると同時に、「中卒」や「大卒」という肩書きにも言及した。また、基地労働を「ちゃんとした仕事」と表現する。男性にとっては、学歴関係なく、初めから「ちゃんとした仕事」に就けることへの魅力が存在しているようだ。「中卒」や「高卒」の男性も、沖縄社会で職に就くことに困難を感じ、基地労働へ参入していく様子が垣間見えた。

一方で、Aさんの夫は、技術系の国家免許を所持している。そのため、Aさんや「中卒」、「高卒」の男性に比べると、就職先の選択肢は広い。そのような男性にとっても基地労働は「ちゃんとした仕事」と認識され、選択肢に含まれていた。Aさんの夫は、「入るときは、まあ、(基地に)賛成というか、そんな感じ」と語る。基地労働の選択には、基地への積極的な思いが関係していたことが分かる。

以上より、ワイネク・佐藤(2019)とは異なるライフサイクルを描くAさんにとっても、基地がAさんのニーズに応え、「自立の重要な道具」(ワイネク・佐藤 2019:100)となっていることが分かる。また、基地労働は男性のニーズにも応える就職先であることが示唆された。「男性が外で稼ぎ、女性が中で家事育児を行う」<sup>3</sup>というジェンダー構造から外れた男女は、沖縄社会で職を獲得することが難しい。沖縄での社会的地位の低さは、基地労働を選択する動機と密接に関連していた。一方で、ジェンダー構造に沿った男性、沖縄社会の中でいくつかの選択肢を保持できると考えられる男性にとっても、基地労働は「ちゃんとした仕事」と認識されていた。沖縄社会で職を獲得することに困難を持つ人々にも、沖縄での社会的地位が比較的高い男性にとっても、基地労働が魅力を持っていることが分かる。しかし、沖縄社会のジェンダー構造に沿うことができない男性たちが、「ちゃんとした仕事」である基地労働を獲得するということは、沖縄社会のジェンダー構造に含まれていくことを意味する。一方で、女性にとって基地労働は沖縄社会のジェンダー構造に含まれることを意味するものではない。女性の場合は、基地労働が唯一の選択肢となる状況が継続していた。

---

<sup>3</sup> 江原 (2004)は、性別分業とは一般に「男は仕事、女は家庭」という「夫婦間の分業」意味する、と述べている。(江原由美子,2004,「ジェンダー秩序」勁草書房)

## 2-1-2、英語の駆使に関わるステイタス

彼女たちはアメリカと関係をもつものが上位にあると認識しており、基地に入ることができ、時に英語を操ることのできる自らのステイタスを一般の沖縄の人よりも優位なものと考えていた。(ワイネク・佐藤 2019:100)

ワイネク・佐藤(2019)は、女性たちが基地労働にこだわる理由として、経済的な労働条件だけでなく、一般の沖縄の人よりも優位な社会的地位を獲得できるためであることが述べられた。そして、そのステイタスを示す行為が、英語を話すことだとされている。

A さんからも、アメリカと関係を結ぶことによって優位な社会的地位を獲得したことを意識する発言を見つけることができる。しかし、A さんは、ステイタスを誇示するための「英語を話す」という手段を、十分に持っているわけではなかった。また、A さんの夫の語りから、英語の駆使がステイタスの誇示に用いられるのは、女性の多い職場に限られる可能性が示唆された。

A さんは、自身が採用された時の経験を語りながら、基地従業員は選ばれた人がなれる職であったことを説明してくれた。

多分 20 年 30 年もっと前かな、は本当にたぶん何が何でもきっちり従業員雇用、なりたいみたいな人達も多かったですよ。だから倍率高かったですよ。

基地従業員が人気の職であり、その時代に A さんは基地労働に参入したことを述べた。また、基地労働と沖縄社会の会社の違いを以下のように語った。

やっぱりアメリカンスタイル。個人情報とか別にそんなのは関係ないねえって感じ。

基地の中の職種って意外にそういう年齢とかあんまり見ないんです。[...]なんかこの面でアメリカ人ってそんなの関係ないんですよ。[...]いやちよ

っとまあ本当日本の社会とか会社でもね[……]全然違うような仕組みって  
いうか。

採用時に、年齢などの個人情報に気にしない様子を、Aさんは「アメリカン  
スタイル」と表現する。「アメリカンスタイル」である基地労働に選ばれた  
経験から、アメリカの優位性を通じて、自らの社会的地位を獲得したといえ  
る。

ワイネク・佐藤(2019)によると、自らのステイタスを誇示する行為とし  
て、代表的な手段の一つは英語を話すことだとしている。Aさんも、採用面  
接時の面接官が外国人だったことや履歴書は英語で書く必要があったこと  
をあげて、基地労働をするために、英語が必要になることを語った。しかし、  
職種によって必要な英語レベルが違うことを指摘し、「私もどっちかってい  
ったら(外国人と関わるのが)そんなには無いんですよ」と述べる。また、  
基地労働をする上で、言葉の壁を感じることもあり、それが大変だというこ  
とも述べた。Aさんは、ステイタスを誇示する行為をそれほど持たないこと  
が分かる。ワイネク・佐藤(2019)で取り上げられた女性たちの語りをふまえ  
ると、英語のレベルが高いほど、社会的地位を獲得したという認識も高まる  
傾向にあることが考えられる。基地従業員の女性の中にも、英語のレベルに  
は差があり、英語レベルによって女性の地位が順序づけられていることも  
予想できる。

ここからは、男性の語りに注目しながら、英語によるステイタスの誇示は、  
女性の多い職種に特有なものである可能性を考えたい。

Aさんの夫は基地内で技術系の職種に就いている。技術系の国家免許が  
必要な職種であるため、職場には男性しかいないと語っていた。上司は外国  
人で、コミュニケーションを取る機会は少なからず存在している。しかし、  
英語については、「自分なんか技術ができれば英語はそんな重要視されてな  
いんですよ」と語った。英語が話せるというステイタスにこだわる様子は特  
に見られなかった。国家免許というステイタスを既に獲得している男性に  
とって、英語が駆使できるというステイタスは下位に位置付けられている。  
つまり、技術系の国家免許が必要な職種は男性化されており、そこでは英語  
を話すことでステイタスを誇示する手段はとられていなかった。Aさんの

夫によると、事務系には女性が多く、Aさんも事務系の職種である<sup>4</sup>。免許の必要ない事務系の職種は女性化されている可能性が高く、免許というステータスの無い女性たちは、英語を話すことでステータスを誇示しようとしていることが分かる。

これらの語りから、Aさんもアメリカの優位性を通じて、自らの社会的地位を獲得したことが分かる。しかし、基地従業員の中には、Aさんのように、ステータスを示す手段である英語を、十分に駆使できない女性も存在する。英語が駆使できるかどうかによって、基地従業員女性の中でも社会的地位の順序づけが存在する可能性が示された<sup>5</sup>。また、免許が必要となるような技術職は、男性化されており、そこでは英語が駆使できるというステータスが重要視されていないことが明らかになった。免許というステータスを持たない、女性化された事務職において、英語がステータスを示す手段となっていた。

### 2-1-3、政治的行為者としての基地従業員女性

彼女たちは自らを政治的な行為者ではなく、ただ生活に必要なことをしているにすぎないと考え、かつそれを自然なことと解釈していた。(ワイネク・佐藤 2019:99)

ワイネク・佐藤(2019)では、就業にともなう葛藤として、基地労働に携わる身でありながら、基地のない沖縄や平和を望む女性の姿が描かれている。基地や軍隊の存在に疑問を抱きながらも、「生活のため」と語る女性たちを、ワイネク・佐藤(2019)は上記のように記述する。また、子どもを育てることができた点で、基地での雇用に対する感謝の気持ちを表す女性

---

<sup>4</sup> 全駐留軍労働組合(2010)は、基地労働は「同一労働同一賃金」が貫徹されているため、統計上も男女別賃金は集計されていない、とする。しかし、男女の職種分布等の差異による男女平均賃金の格差が存在するであろうことは念頭におく必要はある、と述べる。男女の職種分布は統計上示されていないが、職種によって男女の分布が異なることはここでも示唆されていた。(全駐留軍労働組合,2010,「在日米軍基地の労働と地域一組み込まれた特異な構造一」)

<sup>5</sup> ワイネク・佐藤(2019)も、「彼女たち(基地従業員女性たち)は基地内にある英語話者と非英語話者の序列化」に影響を受けているとしている。

もいた。

Aさんも同様の葛藤を抱いていた。しかし、基地労働の経験を通して、政治的行為者としての気づきを獲得している。

Aさんは、現在も基地労働を継続しながらも、「正直基地は無くなって欲しい」と語り、基地のない沖縄や平和を望んでいた。しかし、「やっぱりお給料があるから生活できる。ご飯食べてるからね。生活できるわけだから」と自身の基地労働を解釈している。ところが、Aさんは、基地従業員として働くことを、「ただ生活に必要なことをしているにすぎないと考え、かつそれを自然・当然なことと解釈して」いるわけではなかった。

やっぱりお給料があるから[……]生活できるわけだから。だけど、それはね、あの一個人で考えるものじゃない。なんて言うのかな、なんか、うん、私の生活がどうたらこうたらじゃないっていう。[……]無かったら無かったなりの、何かね仕事探せばいいし。[……]これ（基地労働）にしがみつきたくはないっていう気持ちがいっぱい。

Aさんの就業動機として、子どもを育てるため、という理由が大きく作用していたことは確かである。しかし、子どもや未来のことを考えると、平和な方がいいと語る。

30年後 50年後とかのこと考えると、いや私の人生なんてって思ったりもするし、ね。私今の生活を守るために（基地が）あってほしいとは思いたくないです。

Aさんは、基地の存在や基地労働を当然視せず、そこに固執したくない、という思いが強く現れていた。そう考えるようになった理由を尋ねると、「仕事してからですよ」と語る。それまでは、基地労働も普通の「仕事の一つ」であり、基地は「あって当たり前みたいなもの」と考えていた。しかし、基地の中で働く経験を通して、以下のようなことに気がついている。

（基地内の外国人の暮らしは）やっぱりゆとりがあるような生活に見えますよね。やっぱりこんなに広くて、整備されててね。夏場なんて[……]や

っぱり外人さんエアコン好きだから、エアコンつけたまま海外旅行行くんですよ。やっぱこの電気代も思いやり予算です。

「思いやり予算」に言及し、自身の経験から、政治レベルの気づきを得ている。Aさんや基地労働を選択する女性たちは、経済的にも社会的にも豊かではない状態で入職していく様子が明らかになってきた。そのような女性たちの中には、Aさんのように、自身の生活と基地内の生活の差に違和感を感じ、それを生み出す政治的作用に意識が向くこともあるようだ。Aさんは以下のようにも語る。

(基地の) 中で見て[……]逆に身近に感じられる。[……]政治がらみのこととかが身近に感じる、多分。

基地での労働が、政治への意識をつくったと語る。

Aさんが、生活のために基地労働を選択し、継続していることは確かである。しかし、基地労働の経験を通して、政治的な気づきを獲得し、基地労働を当然視したくない、という思いを語った。基地従業員の中には、自身のことを脱政治化しないまま、就業の葛藤を抱えている女性も存在している。

#### 2-1-4、本節のまとめ

本節では、就業動機と就業にともなう葛藤を考察してきた。基地労働は、沖縄社会のジェンダー構造に沿うことができない男女のニーズに応える職場であった。しかし、男性は基地労働を通して、沖縄社会のジェンダー構造に含まれていくが、女性は沖縄社会のジェンダー構造に含まれないままである。基地労働はその受け皿となり、女性にとっては重要かつ唯一とも思える選択肢となっているのである。女性たちは、経済的地位を獲得するだけでなく、沖縄より上位と認識しているアメリカと関係を結ぶことで、社会的地位を獲得した。そのステイタスを誇示する方法として英語の駆使が指摘されている。しかし、それは女性化された職種に限定される方法であることが示唆された。男性化された職種は、免許という別のステイタスが存在し、英語を話すというステイタスは下位に位置付けられている。免許というステイタスを持たない女性たちは、英語の駆使を通して社会的地位を認識して

いた。経済的地位、社会的地位の向上から基地労働を継続する女性たちだったが、常に抑圧された構造の中にたたずんでいるわけではなかった。基地労働に携わりながらも、基地や軍隊に疑問を抱いている。自身を脱政治化し、基地労働を継続する女性たちもいるが、自身を政治的行為者と位置づけながら労働をする女性も存在した。矛盾を抱えながらも、軍事という国際政治に関わろうとする女性の姿を見つけることができる。

## 2-2、兵士に対するアンビバレントな感情

本節では、「兵士に対するアンビバレントな感情」に注目する。基地従業員女性たちは、兵士に対して恐怖を抱いていないわけではない。しかし、一方的に従属する存在として基地の中に存在しているわけでもない。いくつかの抵抗を表現しながら、自分たちの尊厳を取り戻そうとする。その様子を記述していく。

### 2-2-1、基地内の兵士に対する恐怖

基地の中で仕事をしている限りにおいて、軍規に従う兵士は脅威にならないが、基地から出て厳しい監視から解放された兵士は、沖縄の女性の脅威になると考えられているのである。(ワイネク・佐藤 2019:101)

ワイネク・佐藤(2019)では、基地の中にある女性たちの職場においては、兵士を恐怖の対象とみなしてはいないが、本来的に兵士の存在を危険なものと感じていることが示された。

Aさんも同様に、兵士が女性の脅威になる状況は、基地の外的場合だと考える発言があった。

身は守らなきゃいけないよねって。必要あるのかなみたいな。まあこれはね(基地の)中にいるからそうじゃないけど。やっぱりそれって必要なものかもしれないなーって思ったりもしますね。

基地の中の方が安全な状況があると認識していることが分かる。しかし、基地の中でも兵士に恐怖を抱いた経験を語った。Aさんは、職种的に兵士と関

わることがあまりなく、トレーニングしているのを見かけるくらい、と説明した。しかし、Aさんの近くに兵士が隠れていたというエピソードを語り、「ゾッとした」と語る。続けてAさんは以下のように語る。

軍隊として意識を持った時には、違うんだよなって[...]やっぱり違う人格になるのかなと思っています。信じきれないところがある。[...]やっぱり戦争の話を見聞きしたりとか。人が変わるんだらうなとかね。

身近にいる兵士を軍隊として強く意識したと語り、基地の中にいる兵士を「信じきれない」と述べる。また、「ここにいながらにして国外」という表現を用い、基地内で自分が事故などを起こした場合の不安も語った。

もし何かあった時、誰か助けてくれるのかな。事故起こしたりした時に、どうなるんだらうとか。[...]助けてくれるのかな、とか思います。ここにいながらにして国外。

基地内で、自分が何かを起こしたりした時に、誰も助けてくれないかもしれない、という不安を抱えていた。アメリカを日本よりも上位の存在と捉えているための発言と考えられる。

基地の中の方が安全、という意識は彼女の中に存在しているようだが、基地の中は「国外」だと考えていることも明らかになった。ワイネク・佐藤2019が指摘するように、軍規に従う兵士は脅威にならないと考える一方で、軍隊として意識を持った兵士、人格が変わると語り、基地の中の兵士にも恐怖を抱いている。

## 2-2-2、人種化された権力関係に対するいくつかの抵抗の形

彼ら・彼女らが日々感じている人種化された権力関係に対して、基地を運営し、本当に力を持っているのは兵士ではなく沖縄の自分たちなのだとする事でこれを一瞬逆転させる抵抗のナラティブのように思われる。(ワイネク・佐藤 2019:102)

ワイネク・佐藤(2019)では、「外人<sup>6</sup>は仕事ができない」という言い方をする基地従業員の姿を、人種化された権力構造<sup>7</sup>に抵抗する姿であると記述した。基地における人種化された上下関係の中で兵士より劣位に置かれた沖縄の人々が自らの尊厳を取り戻す行為だとする。

A さんも人種化された権力関係に不満を抱き、「外人は仕事ができない」という言い方で抵抗を見せた。加えて、A さんは別の言い方を用いて、抵抗を表現する。また、A さんの夫も女性たちと同様に不満と抵抗を表明した。

まずは、A さんの不満と抵抗に注目していく。A さんは以下のように不満を述べた。

ある意味日本人がトップに立つことないんですよ。[...]どんなにね、あの仕事ができようが何しようが、やっぱり日本人がトップに立つことはない。やっぱりアメリカじゃないですか。そのリーダーっていうか、やっぱり。

どんなに仕事ができても、アメリカ人の上に立つことはできないことに「やっぱりリーダーはアメリカ」と表現し、諦める様子も読み取れる。しかし、人種化された権力関係をただ受け入れようとするわけではない。

人種的に日本人って真面目ですよ。責任感。だから日本人が働いてくれるから、ある種、(アメリカ人は)まあ任せっきりの部分も、もちろんね。だからってこの頑張ってた人が上に行くことは無い。実際現場でやっぱりきちんと働くのは誰でしょみたいな。

まさに「本当に力を持っているのは兵士ではなく沖縄の自分たちなのだとする」ことで、権力関係を逆転させるような語りをしていた。女性たちの抵抗の形は、「外人は仕事ができない」という語りだけでなく、「外人」内のジ

---

<sup>6</sup> ワイネク・佐藤(2019)は、基地従業員たちが「外人」という言葉を頻繁に用い、兵士とアメリカ人とを区別せずひとまとめに使う傾向がある、と述べる。本研究の対象者も同様の傾向を有していたため、同様の意味で「外人」と用いる。

<sup>7</sup> ワイネク・佐藤(2019)は、基地従業員はその大多数が沖縄の人々であるが、上司はほとんどの場合「外人」である、と述べる。沖縄の基地従業員の存在によって、軍隊に存在する様々な人種の差異を無化し、「アメリカ人」として一枚岩に上位に位置付けられていると指摘する。

エンダー的な権力関係を意識する語りからも見い出すことができる。Aさんは、「外人さんの奥さん」という言葉で、「外人」内のジェンダー的権力関係を浮かび上がらせた。

外人さん同士で、旦那さんが兵隊さん、奥さんが専業主婦だったとします。奥さんが[……]ちょっと仕事始めたいなって言った時に、ある意味旦那さんの、まあ、グレードだったりとか、なんかランクとかって、やっぱり優先して。[……]まあこの人が経験あろうがなかろうが、採用される。

彼女たちと職場を同一にする「外人」の女性たちは、経験の有無ではなく、兵隊の夫のランクによって採用されることに言及した。兵隊の男性のランクによって、女性たちが決定付けられる、という「外人」同士のジェンダー的な権力関係にAさんは気づいているようである。翻って、基地労働を選択する日本人女性たちは、自立できていることに自信を持っていることが明らかにされている(ワイネク・佐藤 2019)。そのような日本人女性にとっては、兵隊の男性ありきの女性を自分の下位に位置付けることができる。Aさんの発言からは、「アメリカ」という自分の上位にいた存在を、「外人の奥さん」という、自立を獲得できない女性として、自分の下位へと逆転させる、という抵抗の形が示された。

続いて、Aさんの夫の語り注目する。人種化された上下関係に不満を抱くのは、女性ばかりではない。ワイネク・佐藤(2019)でも、「外人は仕事できない」という趣旨の語りを男性もしていたことが記述されていた。Aさんの夫からも不満と抵抗を見つけることができる。Aさんの夫に、基地内にランク付けのようなものはあるか、と尋ねたところ、「ありますよ。やっぱり外人が上に」と述べた。技術系の職場でも、上司は外人だという。続けて、「外人」に喧嘩を売られた経験を語った。

外人さんに喧嘩ふられたことある。[……]「お前達に勝てるわけないだろう」って。一般兵はやっぱりもう、18、16ぐらいから兵隊だから血の気もあれですし。

人種化された権力関係を、「外人」から直接突きつけられた経験を語った。

しかし、そのように「喧嘩を売る外人」は、長く軍隊にいるため血の気が多いと解釈している。上司と部下という権力関係ではあるが、上司を「血の気の多い兵士」と考えることを通して、明確な上下関係を和らげようとしていた。

男性の語りに注目することで、人種化された権力関係は、より確実なものになった。この関係に抵抗するため、「外人は仕事ができない」という抵抗のナラティブも確かに存在する。加えて、日本人の基地従業員女性は、自立を獲得した女性として、夫のランクに左右される「外人の奥さん」よりも、自身を上位に位置付けようとする語りも存在した。男性の中にも、上司を「血の気の多い兵士」と解釈し、上下関係を和らげようとする抵抗も見られた。

### 2-2-3、本節のまとめ

本節では、「兵士に対するアンビバレントな感情」に注目してきた。基地従業員女性たちは、基地の外にいる、軍規から解放された兵士たちに恐怖を覚える。基地内でも軍隊として意識した兵士たちを脅威に感じる女性もいる。しかし、基地従業員たちは恐怖に支配されるだけの存在ではない。人種化された権力関係に気づいており、さまざまに抵抗の形を示していた。「外人は仕事ができない」という言説の他にも、「外人の奥さん」という語りも存在する。自立を求め、それを獲得できたことに自信を持つ日本人女性たちは、兵隊の夫のランクに左右される「外人の奥さん」を下位に位置付けていた。また、日本人男性も、上司を「血の気の多い兵士」と解釈することで、喧嘩を売る形で権力関係を示す「外人」を冷静に受け流している様子が見えがえた。

### 2-3、基地従業員たちの抵抗と恭順

本節では、「基地従業員たちの抵抗と恭順」<sup>8</sup>について記述する。基地従業員たちは、基地のない沖縄に不安と希望を抱く。希望を抱く者の中には、基地の存在に抵抗しようとする者もいる。しかし、その表現の仕方は、男女で異なっ

---

<sup>8</sup> 抵抗と恭順というキーワードは、軍事化というダンスを踊る際に「不平等なパートナー」(Enloe 2000:10)に抗ったりしたがったりする女性たちの行為主体性を示す用語である。(ワイネク・佐藤 2019:103)

ていた。

### 2-3-1、基地がない沖縄への希望、男性の抵抗と女性の抵抗

基地がある現在よりも、多少の不安があっても基地のない将来を選ぶ。それは未来の子供たちへの思いゆえの小さな抵抗の決意でもある。(ワイネク・佐藤 2019:105)

ワイネク・佐藤(2019)は、基地がない沖縄への不安と希望を抱く基地従業員女性たちの存在を明らかにした。基地がある方が沖縄の人々の生活のためになると考える女性や、本土よりもアメリカに依存する方がまだ沖縄のためになる、と基地のない沖縄に不安を抱く女性も存在する。一方で、基地労働に携わりつつ、基地のない沖縄を前向きに考えようとする女性たちも存在した。それは、同僚との間で、慎重に基地問題の話題を避ける女性たちのささやかな抵抗だとされている。

Aさんも生活の不安を抱えながらも、基地のない沖縄を理想だと語った。基地が返還された街を例に出し、跡地利用で栄えていると語る。Aさんは、基地が無くなったとしても、「無かったら無かったなりの、何かね、仕事探せばいいし」と前向きな姿勢を見せる。このように考える理由を聞くと、次のように語った。

子供を産んでから、子供守りたいっていう、意識が強くなってきてからです。未来を見る、託す。やっぱり子供たち。平和であるためには、っていうのをまあ意識してからかな。

ワイネク・佐藤(2019)で紹介された女性たちと同様に、Aさんも、「未来の子どもたちへの思いゆえの小さな抵抗の決意」を示した。

Aさんの夫も基地のない沖縄への希望を抱いている。Aさんと同様に、基地が返還され跡地利用で栄えた街を例に出し、「返還されてよかったな、と思っている」と語る。しかし、Aさんの夫は、女性たちとは異なった抵抗の仕方を示す。夫は自分の所属する組合を通して、同様の意見を持つ人々の存在を知っていた。夫は、具体的な政党名を出しながら、要望にあう政策を支

持っていることを述べる。組合を通じて、組織的な抵抗をする様子は、女性の語りからは見られなかった。Aさんの夫は、女性たちよりもはっきりした形で抵抗を示している。より政治に近いところにある男性の抵抗は、沖縄における「男性化された国際政治」(Tickner1992=2005)の現状を伝えるものかもしれない。しかし、基地従業員女性たちの抵抗は、この現状に従順なだけの存在ではない、能動的な行為者であることを示すものである。

基地従業員女性たちは、ただ基地の存在に恭順を示すわけではなく、それぞれに小さな抵抗をしている。しかし、同僚のいる「ブレイクルーム」では慎重にそうした話題を避けていることが指摘されている(ワイネク・佐藤2019)。Aさんも、自分と同様に考えている人は「少ないかもしれない」と語った。しかし、自分と異なる意見を持つかもしれない女性たちに共感を示し、「やっぱりみんな自分の生活を守りたいし。正直ねえ」と述べる。Aさんは、基地で労働することを通して、政治的な気づきを獲得した。選挙があるときには、「投票には行こうよ」と声をかけるようにしていると述べた。Aさんは、基地従業員のことを「知らない人とか[...]単純に基地反対、賛成でしか、うわべだけしか見ない」と不満を語る。Aさんは、基地内部の様々な葛藤を伝える一つの方法として投票を位置づけているようだ。

### 2-3-2、本節のまとめ

本研究の対象者2人は、基地のない沖縄に対して希望を語った。基地の存在に恭順を示すだけでなく、抵抗も示していた。しかし、その抵抗の表現の仕方には、男女で大きな差があるように思える。男性は、政治的な意見を組織的に、また、公に表現することができる。一方で、女性たちは、同僚の間で基地の話題に触れることにも慎重である。政治の領域における男女非対称を目の当たりにしたように思えるが、決して女性たちが政治の領域から排除されているわけでも、自ら遠ざかろうとしているわけではない。ワイネク・佐藤(2019)が見出した女性たちのささやかな抵抗の決意や、Aさんのように、投票を自分の思いを表明する方法として位置づけ小さく行動する姿が見出された。女性たちは、ただ従順な存在として基地労働をするのではなく、行為主体として葛藤を抱え、小さくも抵抗を示しているのである。

### 第3章 本研究のまとめ

以上述べてきたように、本研究では、ジェンダー化された沖縄の軍事化の様相を明らかにするために、基地従業員たちの語りを記述してきた。男女の性的関係のように私的だと思われているものが、公的な国際政治と密接に関連していることを説明した、フェミニスト国際関係論をもとに、基地従業員たちの経験をアンビバレンスに注目して分析した。

ワイネク・佐藤(2019)の研究と、本研究の対象者の語りから、基地労働が男女ともにさまざまなニーズに応える仕事であることが明らかになってきた。沖縄社会のジェンダー構造の中で、民間の会社へ入職することが困難な男女にとって、基地労働は条件の良い仕事となっていた。「男は仕事、女は家庭」(江原,2004)のジェンダー構造の中で、家計を支えることを要求される男性にとって、学歴に関係なく「ちゃんとした」仕事に就けることは大きな魅力を持つものであった。離婚した女性やシングルマザーなど、1人で生計を立てる必要のある女性にとっては「自立の重要な道具」となる。沖縄社会で、同様に就職に困難を感じる男女であったが、男性にとって基地労働は、沖縄社会のジェンダー構造へ含まれていくことを意味している。女性の自立を支えると同時に、沖縄社会での女性の労働を困難にしている不平等なジェンダー構造を再生産していた。基地労働は、沖縄の労働市場において重要な位置を占めているが、それは沖縄社会のジェンダー構造に依拠することで確立できる位置であった。

女性たちが基地労働を継続するのは、自立のための経済的地位の獲得だけでなく、アメリカと関係を結ぶことによる社会的地位の獲得にも依拠している。英語を駆使することを通してステイタスを誇示する彼女たちだが、それは女性化された職場特有なものであった。技術系の職場など、免許が必要になる職場は男性化されており、英語を駆使するというステイタスが免許を所持しているというステイタスを上回ることはなかった。免許という公に認められたステイタスを持たない女性たちは、アメリカの優位性に頼りながら、社会的地位を獲得していた。

経済的、社会的地位を獲得しながら、高度な軍事化の維持に貢献する彼女たちだが、基地や軍隊に疑問を持つ女性もいる。しかし、「生活のために必要なこと」と脱政治化することで納得する女性の存在が指摘されてきた。ところが、基地や軍隊への疑問をかき消さず、基地の内側からその疑問を洗練させていく女性の

姿を描いてきた。基地内での労働を通して、政治レベルへの気づきを獲得した女性も存在する。政治的行為者として意識を醸成しながら基地労働を継続していた。

また、基地や軍隊という存在だけでなく、兵士に対しても決して明るい感情だけで関わっているわけではない。これまでは、基地の外における兵士への恐怖が語られてきたが、基地の内外に関わらず、恐怖を感じる女性も存在する。兵士とは何をする仕事なのかを考えると、「信じきれない」ところがあると語る。それでも、男らしさを特権化した在日米軍に依存するのは、ワイネク・佐藤(2019)が述べるように、「経済的な不安が身体的な不安にとってかわって」いるためである。加えて、基地の中を女性は「国外」と表現した。そのため、「誰にも守ってもらえない」という不安を語る。これは、アメリカを、日本や沖縄よりも上位の存在と認識しているためである。社会的地位をアメリカの優位性に頼って獲得した女性たちだったが、アメリカの優位性を認めることは、女性たちの不安や不満を作り出す原因にもなっていた。

しかし、基地従業員たちは、兵士に常に従属するのではなく、時に立場を逆転させるような抵抗をしてきた。ワイネク・佐藤(2019)が示したようにアメリカ人の仕事の能力の低さに言及することを通して、自己の尊厳を取り戻そうとする基地従業員の姿は、本研究でも見出すことができた。加えて、基地従業員女性は、「外人の奥さん」と表現することで、女性として自立した自分をアメリカ人よりも上位に位置づけるような言説も見つけられる。男性も、人種化された権力関係に自覚的であり、抵抗を示す。兵士であるアメリカ人は、青年期から軍隊にいたため、「血の気」が多いとし、上司と部下という権力関係を和らげようとする抵抗が見られた。

さらに、基地のない沖縄に対して希望を語った基地従業員たちは、基地の存在にも抵抗を示している。しかし、その抵抗の表現には男女で大きな差が存在していた。男性は、政治的な意見を組織的に、公に表現する一方、女性たちは、同僚と基地問題の話題に触れることにも慎重であった。フェミニスト国際関係論の問題意識である、国際政治の場における女性の不在を目の当たりにしたように思える。しかし、基地従業員女性たちは、政治の場から自ら遠ざかろうとしていくわけではない。ワイネク・佐藤(2019)が示した女性たちは、ささやかな抵抗の決意を明らかにし、本研究では、投票を自分の思いを表明する方法として位置付け小さく行動する女性の姿を見出した。彼女たちは、従順に現状を眺めているだ

けではなく、基地の内側で抵抗を示している。

このように、基地従業員女性と基地従業員男性のアンビバレンスに注目し、沖縄におけるジェンダー化された軍事化の様相を見てきた。エンローは、「ジェンダー化された軍事化を促進するこうした意思決定の調査は、しばしば、アンビバレンスへと、すなわち、迷いを持った男女へとたどりつく。しかしながら、男らしさを特権化する軍事化は、そうした迷いの上でも生きのびるし、栄えることすらできる」(Enloe2000=2006:37)と述べる。そして、ワイネク・佐藤(2019)は以下のように述べる。「沖縄社会におけるジェンダー構造からの解放を求める彼女たちが、在日米軍の協力者として生きていくことを選びとり、ジェンダー化された軍事化の抑圧的な構造を自ら再生産することにもつながっていた」。

ワイネク・佐藤(2019)の課題に挑戦した本研究も、基地従業員の男女のアンビバレンスにたどりついた。しかし、葛藤の中で在日米軍の協力者として生きていくことを選ぶことは、ジェンダー化された軍事化の抑圧的な構造を自ら再生産することにつながっている。たしかに、男女の迷いの上で、男らしさを特権化する軍事化は生きのび、栄えていた。その中でも、小さな抵抗を実践し、そして勇気ある小さな行動を起こす女性の姿を描いた。能動的な行為者としての女性、そして政治的行為者としての女性の存在を、基地の内部に見つけることができた。

しかし、ジェンダー化された軍事化の解明するためにはさらなる語りの収集が必要である。男性の語りを本研究では取り入れたが、部分的に組み込むだけに終わった。女性の語りも1人の収集に留まったため、示唆で終わる部分も多々あった。さらなる語りを収集し、ジェンダー化された軍事化を解明することを今後の研究課題としたい。

## 参考文献

- 池宮城陽子,2019,「沖縄基地問題の起源を探る」
- 江原由美子,2004,「ジェンダー秩序」勁草書房
- 沖縄県,2020,「沖縄から伝えたい。米軍基地の話。Q&A Book 令和2年版」
- 星野英一,2013,「沖縄の米軍基地問題と人間の安全保障」
- 菊池夏野,2002,「売春禁止の言説軍事占領—米軍占領初期沖縄から—」
- 島袋純・阿部浩己,2015,「沖縄が問う日本の安全保障」岩波書店
- 全駐留軍労働組合,2010,「在日米軍基地の労働と地域—組み込まれた特異な構造—」
- 茶園敏美,2014,「GIと付き合うおんなたち：占領期日本における「オンリー・ワン」」
- ノーラ・ワイネク,佐藤文香.2019,「沖縄で在日米軍と共に生きる—基地従業員女性の経験の両義性に注目して」『ジェンダー研究』第22号：pp.93-110
- 林奈津子,2007,「国際政治学におけるジェンダー研究—アメリカの研究動向を中心として—」『ジェンダー研究』第10号:pp.99-110
- 平井和子,2014,「日本占領をジェンダー視点で問い直す—日米合作の性政策と女性の分断—」『ジェンダー史学』第10号:pp.5-16
- 星野英一,2013,「沖縄の米軍基地問題と人間の安全保障」
- 松本英樹,2004,「沖縄における米軍基地問題—その歴史的経緯と現状—」
- 宮城晴美,2019,「「被近代化」の暴力性—沖縄女性の風俗改良から「集団自決まで」—」『北東アジア研究』別冊第5号:pp.127-145
- 宮西香穂里, 2012, 『沖縄軍人妻の研究』 京都大学学術出版会.
- Enloe,Cynthia. 2000, *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, Berkeley, University of California Press. (上野千鶴子監訳・佐藤文香訳, 2006, 『策略—女性を軍事化する国際政治』 岩波書店).
- J,Ann Tickner. 1992, *Gender in international Relations: Feminist Perspectives on Achieving Global Security*, Columbia University Press. (進藤久美子・進藤栄一訳, 2005, 『国際関係論とジェンダー—安全保障のフェミニズムの味方—』 岩波書店)